

4 遺 物

形刺突が認められる。1345は横鋸歯状沈線をもつものである。1346は鎖状隆帯をもつ縄Ⅸ系列の土器である。沈線にはキザミが付される。1347は眼鏡状把手を中心とした基隆帯による渦巻文が見られる。基隆帯にそって沈線、有節沈線が見られる。縄Ⅰ系列である。1354～1358が浅鉢である。1354・1355はB器形、1356～1358がA器形となる。

34-F区出土土器 (1359～1360)

1359は縄文系で胴部に渦巻文を有する。1360は太い隆帯及び連続のキザミが認められる。

34-G区出土土器 (1361～1363)

1361は口縁部隆帯楕円区画で、区画にそって刺突の付される沈線がめぐる。

35-D区出土土器 (1364～1367)

1364は隆Ⅱb系列の土器である。口縁部文様帯は横半隆起線で、眼鏡状把手を有する。胴部は基隆帯による渦巻文で、玉抱き三叉文が充填される。1365は縄Ⅱ系列と思われる。橋状把手をもち、楕円区画内にキザミが付される。1366は刺突沈線及び山形状の沈線が見られる。

36-E区出土土器 (1368)

A器形の浅鉢で、半隆起線文による。

36-G区出土土器 (1369)

A器形の浅鉢で爪形文が見られる。

37-F区出土土器 (1370)

隆Ⅰ系列の深鉢で、太い隆帯がクランク状に垂下する。また渦巻文も見られ、沈線文等が充填される。

b) その他の土器 (図版147・148・295～297)

早期の土器 (1371～1399)

1371はやや縦長の楕円押型文を密接施文すると思われるもので、内面と外面では胎土・色調に際立った違いが観察される。内面は石英・長石など微細砂粒を含み暗灰褐色を呈するが、外面は褐色粘土粒を多く含み緻密で淡黄橙色である。これは器形を整形した後に、異質な粘土を外面に塗り付け施文した可能性が考えられる。

1372はいわゆる「天狗の鼻状」の尖底部で、胎土には石英・長石・褐色粒などの砂粒を多く含む。内面は淡黄色橙色、外面は灰橙色を呈する。外面は底部先端に至るまで、比較的に丁寧なナデが施されている。形態の特徴から田戸下層式土器の底部と思われる。

1373は平行沈線文と貝殻腹縁による刺突文を併用するもので、胎土には石英・長石・褐色粒などの砂粒を多く含み、焼成は比較的に堅緻である。文様は横位平行沈線間に貝殻腹縁による斜位の刺突文を充填するもので、田戸上層式併行期もしくは直後段階に位置付けられる。

1374～1379は太い沈線によって文様を構成するもので、野鳥式土器に比定される。1374・1375は同一個体で、胴部に一段のくびれを有する平縁の深鉢である。口唇部は内削ぎ状である。胎土には微細な石英・長石粒・繊維を多く含み、焼成は堅緻である。くびれから口縁にかけて太い沈線により幾何学的な区画文を描き、区画内には同じ沈線を縦位平行に充填する。また、文様帯を縦に分割すると思われる、刻みを付けた隆帯がわずかに認めらる。くびれから下の胴部には条痕が横走するが、内面には条痕は認められない。1376～1379は胎土・色調などから同一個体と思われるが、文様構成は不明である。器形は胴部で屈曲して

外反するものと思われ、口縁は波状を呈する。半截竹管状工具による刺突列を屈曲部に一列巡らし、太い沈線による平行斜線文を施す。また、口縁に沿って同一工具によると思われる短沈線を加える。内外面には条痕文が施文されるが、内面には炭化物の付着が顕著である。いずれも、野鳥式の最終段階であろう。

1380～1383は細隆起線および細沈線によって幾何学的な区画文を描き交点に刺突文を加えるもので、鶺鴒ヶ島台式土器に比定される。1380は細隆起線の交点及び細隆起線上に半截竹管状工具による刺突文が加えられるが、細隆起線によって区画された内部には沈線文などの充填はなく、弱いナヅリが認められる。胎土には石英・長石を多く含み、繊維の混入もわずかに認められる。焼成はもろく、外面には炭化物の付着が認められる。1381～1383は同一個体で、基本的な文様構成は1374・1375と同じである。ヘラ状工具による細沈線で幾何学的な区画文を描き、交点には半截竹管状工具による刺突文を施す。区画内は地文の条痕をそのまま残す部分と、平行太沈線を充填する部分が見られる。内面には条痕が明瞭に残り、炭化物の付着が著しい。

1384～1390はいずれも条痕のみを施文するもので、胎土には繊維を多く混入する。1385・1386は口縁部片で、それぞれ外反気味の丸頭状と直線的に立ち上る角頭状を呈する。1385～1388・1390は褐色を呈し、焼成も比較的堅緻で、内面に条痕は認められない。1384・1389は胎土は緻密であるが焼成はもろく、外面の条痕は不明瞭である。条痕文系の粗製土器と思われる。

1391～1393は同一個体で、絡条体圧痕文によって文様を構成する土器である。胎土には微細～中粒の砂粒及び繊維を多量に含み、焼成は良好である。色調は内・外面とも灰褐色を呈し、外面には炭化物の付着が著しい。絡条体原体は器面に現われた圧痕を観察すると幅4mm前後で、直線圧痕と曲線圧痕の組み合わせによって文様が構成されている。このような特徴を有する絡条体圧痕文は、県内の早期終末に位置付けられている〔小熊1989〕。

1394～1399はいずれも縄文のみを施文するもので、胎土には砂粒・繊維を多く混入する。1394～1399は同一個体で、縄文(LR)を不規則に施文する。1394は底部付近の破片であるが、底部付近の形態から丸底を呈するものであろう。外面は明褐色、内面は暗褐色を呈する。1398は前々段反撚の羽状縄文を施文するものである。早期末から前期初頭に位置付けられよう。

前期の土器 (1400～1420)

1400は胴部からやや内湾しながら口縁部に至る深鉢で、口唇の一端にU字状の注ぎ口を持つ、いわゆる片口土器である。口縁部形態は平縁で、端部は丸みを帯びる。胎土には細砂粒・繊維を多量に含み、焼成は比較的良好である。外面は黒色から褐色で、内面は褐色を呈する。地文には複節斜縄文(正反の合)を施し、口縁部直下と胴部にはコンパス文をそれぞれ一条巡らす。関山Ⅱ式に比定されるものである。

1401～1406は諸磯a式土器で、いずれも胎土には石英・長石粒を中量含み、焼成は比較的に良好である。内外面とも赤褐色を呈するものが多く、内面は比較的丁寧なナデが施されている。器厚は7～9mmである。1401はやや内湾しながら開く深鉢の口縁部で、端部は丸く納まる。口唇部直下には無文帯を挟んで平行する幅の狭い爪形文と、刻みの加えられた太い隆起線を巡らす。以下には半截竹管をまとめた櫛状工具による平行線文・波状文が施文される。1402～1404は平行沈線・波状文を施文した後に、竹管状工具による円形刺突文を施文したものである。1402は地文に無節縄文(L)が施文されている。1403は口縁部片で1404と共に、胎土・色調などから1401と同一個体の可能性が考えられる。1405・1406は平行線文・波状文のみの胴部片である。

1407～1412は諸磯b式土器である。1407・1408は同一個体で、半截竹管状工具による連続爪形文を文様